

9・東松島市におけるレスキューと被災ミュージアム再興事業

菅原 弘樹 東松島市教育委員会／奥松島縄文村歴史資料館 館長

0. はじめに

東松島市は、石巻市と松島町に挟まれた太平洋沿岸地域に位置する。特別名勝松島の一角を占め、とくに松島湾の入り口に浮かぶ宮戸島から野蒜海岸にかけては、「奥松島」と呼ばれ、松島本来の姿を留める地域として重要な位置を占めている。

東日本大震災により、東松島市では市街地の約65%が浸水し、死者1,103人、行方不明者28人と多くの方が犠牲となった。特別名勝松島地域、とくに野蒜地区の被害は大きく、亡くなられた方の約半数を占め、95%以上の住家等が被害を受けるなど甚大な被害を被った。史跡里浜貝塚と奥松島縄文村歴史資料館がある対岸の宮戸島でも、人的被害は幸いにして少なかったものの、4つの浜の集落のうち、外洋に面した入り江に位置する3集落が大津波によって壊滅的な被害を受けた。

野蒜・宮戸地区では、多くの文化財や収蔵施設等も被災し、甚大な被害を受けたが、救援委員会による迅速な支援によって、被災遺物の回収や応急措置等の対応をおこなっていただいた。ただし、震災後まもなく2年を経過するが、市民生活の復興もままならない中、文化財の再生に向けた事業は、緒に就いたばかりの状況にある。以下、東松島市における文化財収蔵施設の被災状況と救済委員会による文化財レスキュー、その後の整理の進捗および現状について報告する。

1. 文化財収蔵施設の被災状況

1-1 被災前の収蔵状況

奥松島縄文村歴史資料館は、史跡里浜貝塚から出土した資料の展示を目的とした施設である。昭和26～37年の東北大学教育教養学部による発掘資料と平成8年以降の館発掘資料が、収蔵資料の大半を占める。ただし、資料館の収蔵庫は、整理用コンテナ1,200箱程の収蔵スペース(約80㎡)しかなく、10年ほど前から約5km離れた野蒜の民俗資料等収蔵兼展示施設(旧野蒜保育所)を資料館の第

二収蔵庫(野蒜文化財収蔵庫)として利用していた。震災の半年前に床を板張りからコンクリートのベタ基礎に改修し、約100㎡のスペースに土器、石器、動物遺存体等の考古資料約800箱と民俗資料10点、埋蔵文化財関係の古い図面類約100点を収蔵していた。

1-2 被災状況

縄文村資料館には、展示遺物のほかに、接合復元された土器や骨角器、再整理途中の資料を収蔵していた。地震の大きな揺れによって復元した土器は壊れ、棚の上や床に平積みしていた整理用コンテナも崩れて散乱する状態となったが、幸い津波の影響は少なく、展示ケースや収蔵庫までは及ばずに済んだ。

一方、野蒜の文化財収蔵庫の被害は大きく、2階建て相当の高さのある天井まで津波が押し寄せた。隣接する野蒜小学校の体育館は、避難してきた人々を津波が襲い、約20人の方々が犠牲となった場所である。建物周辺には住宅や車等が流れ着き、大量の瓦礫で山となっていた。平積みしていた整理用コンテナは崩れて転倒し、一部は屋外に押し出された。屋内に留まった資料も流入してきた大量の瓦礫や土砂にまみれて埋没し、中には足を踏み入れることもできない状況だった。



野蒜文化財収蔵庫の被災状況

2. 野蒜文化財収蔵庫のレスキュー

2-1 レスキューまでの経過と市の体制

孤立した島で避難所の運営に携わっていた我々文化財担当者が、こうした状況を確認できたのは、島と野蒜を繋ぐ橋が復旧し行き来できるようになってからで、震災発生から3週間後のことである。建物の周辺では、自衛隊による行方不明者の捜索活動が続けられていた。被災した収蔵庫には搬出のための車両も近付けず、また資料館の電気・水道の復旧の目処も立たない中、その時点では被災遺物の回収を行うことなど、現実的なものとして考えることはできなかった。

その後、宮城県文化財保護課を通じて、東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会に被災資料の回収に係る支援を要請し、レスキューの内容や方法、スケジュール、レスキュー後の資料整理、保管場所等、現地確認を含め、事務局と協議、調整が行われた。

レスキューは2回に分けて行われ、6月9・10日に事前調査と屋外に流失した資料の回収、そして周辺の瓦礫の撤去が進み、島の水道が復旧した後の7月5～8日に、屋内に残された資料の回収が行われた。

その間、緊急雇用対策事業やミュージアム支援活性化事業（宮城県ミュージアム復興事業実行委員会）の採択を受けて、震災前から発掘調査や遺物整理等に從事してもらっていた地元の方々を中心に雇用し、市教育委員会として被災資料の回収と回収後の資料整理の体制を整えた。

2-2 被災遺物の回収作業

野蒜文化財収蔵庫内のレスキューは、国立文化財機構（東京文化財研究所、東京国立博物館、奈良国立博物館、奈良文化財研究所、九州国立博物館）、北海道開拓記念館、東北大学植物園、宮城県考古学会、文化庁、東北歴史博物館、多賀城跡調査研究所等から、連日15～20名の方々の協力を得て行われた。

資料の回収は、電気もない暗い屋内で、発電機による投光器の明かりを頼りに、大量の瓦礫と土砂を屋外に搬出しながらの作業となった。6日間で、整理用テンバコ約650箱分の考古資料と民俗資料、図面類を回収することができた。

発掘や遺物整理等に慣れた作業員を雇用し、東松島市としての体制を整えたものの、専門職員3名だけの体制ではかなりの時間を要したであろう。資料館全体が、島の対策本部として震災対応に追われる中、短期間で回収できた

ことは、大変有り難かった。

しかも、震災前の大まかな収納場所をもとに、屋内を分割し、現地で土器・石器・動物遺存体等の種類ごとに分別回収し、箱番号を付し、テンバコの内容の記載と写真の記録を副えて、資料館に搬入していただいたお陰で、回収後の水洗いと仕分け作業を効率良く進めることができた。

3. 被災ミュージアム再興事業

3-1 レスキュー後の整理作業

回収した資料の洗浄は、回収作業が終わった翌日からスタートした。被災した施設の周辺には工場や水産加工等の施設はなく、野蒜海岸から直線約1.2kmの位置で、外洋からの津波を直接受けたせいか、汚染度は低く、砂や泥にまみれた資料もほとんどのものが一度の水洗いできれいになった。

ただし、テンバコに回収された資料は収納時の一括性は保たれておらず、地点や調査区、層位等混在した状況にあった。遺物に注記された出土情報のみが頼りとなるが、注記のないものや破片が小さく、地点あるいは層位のみが記されているもの等さまざま、古い発掘資料の中には、ポスターカラーのみで注記されたものもあり、判読できないものが多くあった。注記の大切さを再認識させられた。

3-2 奥松島縄文村歴史資料館復興事業

被災資料の再整理と修復・復元作業は、平成23年7月～24年6月は宮城県ミュージアム復興事業、平成24年7月からは宮城県被災ミュージアム再興事業の採択を受けて進めている。

具体的には、里浜貝塚の発掘資料を中心に、①縄文村歴史資料館収蔵資料の修復・復元、②野蒜文化財収蔵庫から回収した資料の洗浄・分類、修復・復元、③これらの資料の図化・データベース化等の事業を平成28年度までの6カ年計画で行っている。

現在のところ、野蒜文化財収蔵庫から回収した資料については、水洗いと一時的な仕分け作業はほぼ終了した。今後は、発掘調査時の記録に従って、再分類し、公開活用に向けた整理および修理・修復を行っていく予定だが、長年の発掘調査による膨大な量の資料であり、どこまで再生できるのか、未だ見えない試行錯誤の状況にある。資料の限界性も踏まえつつ、進めていきたい。

なお、再整理後の資料については、平成25年度に増築する資料館収蔵庫で一元的に収蔵管理し、整理作業と並行し



発掘地点ごとに仕分けられた考古資料

ながら、展示公開等、積極的な活用を図っていく予定である。

4. おわりに

東日本大震災により、野蒜・宮戸地区のほぼ全域が被災し、地域の文化遺産も甚大な被害を受けた。その一方で、縄文集落のある高台は津波による被害を受けなかった。今回の災害を受けて、地域の人々が度重なる災害とどう向き合い、克服してきたか、地域の歴史や遺跡に対する関心が高まってきている。

文化財を再生し、後世まで継承していくとともに、地域の文化遺産を復興まちづくりや観光等の地域再生の資源、地域の財産として、どう活かしていくか。その活かし方も重要であり、資料の修復に終わらない、地域の文化遺産としての再生と活用を図っていきたい。